

1. 授業の基本情報

平成30年度後学期における教職科目B

「美術科教育法Ⅳ」を取り上げる。これは主に3回生を対象としたものであり、中学校の教員免許を取得する際の、いわばまとめとして位置付けられている授業である。登録学生は学校教育教員養成課程中等美術コースの学生2名、小学校サブコースの学生1名、計3名である。

(1) 授業の目的

本授業は「主として教育実習やこれまで受講してきた美術科教育法での学びをもとに、中学校等に係る美術科教育の課題を見だし、論考としてまとめることでその解決を図ろうとするとともにその成果を分かりやすく再編しポスター発表すること」ことを目的とするものである。

(2) 到達目標

上記(1)を受けて以下の到達目標を設定した。

- 1) 教材研究の意義や方法をはじめ授業の立案・実践・評価をする。
- 2) これまでの学習を振り返り美術科教育の課題を抽出し説明する。
- 3) 課題解決のための方策を見だし、多角的で論理的な思考により論考としてまとめ、発表する。

(3) 主な取組の工夫

上記(2)達成のために、「教育課題の抽出・明確化」「課題解決の方策の設定」「具体的な課題探求」「教育論文の作成」「ポスター作成」について段階的に達成できるような授業構成とした。

- ① ガイダンス
- ② 教育課題の抽出・明確化
- ③④ 課題解決の方策の設定
- ⑤～⑦ 課題探求・解決（教材・文献研究等）
- ⑧⑨ 模擬授業と省察（検討会）
- ⑩～⑭ 教育論文の作成、ポスター作成
- ⑮ まとめ

例えば②～④では、主として教育実習での

実践（提案・観察等）にもとづき、自身の疑問や課題を抽出し、その解決に相応しい方策（教材研究か、模擬授業か、観察か、文献研究か、それらの複合形態か…等）を設定する。この上で、⑤～⑦では各自で設定した方策により課題探求に取り組み（必要に応じて模擬授業等を実施するなどして）、⑩～⑭では論文およびポスターという形式における論考のまとめに取り組んだ。

このような段階的な取組を経ることで、つまり教育課題(問い)→文献による調査・考察→模擬授業としての再提案ないし観察等による実証など→論考・論述→教育論文としてのまとめ、およびポスターとしてのまとめ、などというように、授業者は各自の教育課題(問い)を深めることができたものと考えている。

2. 授業評価・授業研究の内容

上記1(3)に示したような段階を踏んで理解を深めることを企図したことを鑑み、学生による授業評価に係る質問は、選択式と改善点に関する自由記述式とした。なお、解答率は3/3人であった。以下に、質問項目と併せてその結果を報告する。その際、紙面の都合上で自由記述の回答は摘要とした。

(1) 尺度型

問①は「自身の教育課題の設定に興味・関心をもって取り組み、考えを深めることができたか」、同②は「自身の教育課題の解決に意欲的に取り組み、考えを深めることができたか」で、それぞれ「十分あてはまる」が2名、「あまりあてはまらない」が1名ずつ、また同③は「教育論文の作成に意欲的に取り組み、考えを深めることができたか」、④は「ポスターの作成に意欲的に取り組み、考えを深めることができたか」で、それぞれ「十分意欲的に取り組んだ」が2名、「あまり取り組めなかった」が1名ずつであった。さらに同⑤⑦は「具体的な課題解決に係る取組へ

の評価について」で、それぞれ「十分／意欲的に取り組んだ」「あまり取り組めなかった」が1名ずつ、⑧は「意欲的に発表会に取り組めたか」で、それぞれ「十分／意欲的に取り組んだ」が2名と1名、⑨は「本授業に係る予習・復習への取組について」で、「かなりあてはまる」が2名、「あまりあてはまらない」が1名、最後に同⑩は「教員の話し方や配布資料等について」で「十分である」という回答が3名であった。

(2)自由記述型

①授業内容に関して今後も継続すべき点

- ・模擬授業の実践による、題材の研究や検証を行う点。

②授業内容に関して改善すべき点

- ・生徒同士の意見の交換や話し合い、進行状況の報告を詳しく行う。

③その他（意見・要望等）

- ・次回までにやるべきことなどについて、把握しフィードバックすべきであった。

3. 「地域社会を核とした教育と研究のつながり」について

(1)「教育課題の抽出・明確化」「課題解決の方策の設定」「課題探求・解決（教材・文献研究等）」

主として、到達目標2)の「これまでの学習を振り返り美術科教育の課題を抽出し説明すること」および同3)の「課題解決のための方策を見いだし、多角的で論理的な思考により論考としてまとめること」を実現するために、教育実習における受講生各自の反省をもとに、教育論文に係る教育課題を設定するとともに、課題解決の方策を設定、具体的な課題探求・解決（教材・文献研究等）のための取組を進めた。つまりこれは、課題設定・解決方策の設定および具体的な課題探求・解決への取組にあたり、それら各々に係る局所的で地域的な特性への理解を深めることも企図して行ったものである。しかしながら、先の授業評価にもあったように、受講生に主体的な学習を促すことが不十分であった。受講生自身の経験や問題意識をきちんと絞り込む手立てが必要であった。

(2)「教材研究」「学習指導案の作成」「模擬授業観察」の企画・準備・実践

主として到達目標1)の「教材研究の意義や方法」の充実、および同3)への発展的な

展開を期待して行ったものである。

この模擬授業につながる教材研究・学習指導案の作成・模擬授業観察は、受講者各自の必要に応じて実施されるものであるが、受講生はこれらの取組に至るまでに(1)の学習過程を経ている。つまりこれは、何れにおいても受講生各自によるそれぞれの経験や考察にもとづく提案となることが予想されるため、そうした経験および考察の内容をきちんと整理した上で、自分なりのアイデア等として盛り込むことで、学習内容の地域的特性と学習指導要領のあり方に関する、より実践的で具体的な理解の深長を期待することができるのではないかと考えたのである。しかしながら、このことに関しても先の授業評価にもあったように、受講生に主体的な学習を促すことが不十分であった。上記のような受講生自身の必要性を促すためにも、まずは(1)の取組を反省しより重点化していくことにしたい。

(3)「教育論文」「ポスター」の作成・発表

造形芸術コース4回生の卒業制作展と同時開催した学校教育教員養成課程2・3回生展において、教育論文としてまとめた論考をポスター形式に再編集してまとめ、展示するとともに発表会を行った。このことにより、各自の取組が広く近隣地域の観覧者に知られ、意見や感想等をいただくなどすることにより、今後の研究の深化につながるものと考えられる。このことについては、受講生より肯定的な評価を得ている。

(5)総括

以上のことから、受講生自身が（主体的とまでは言えないまでも）「教育課題の抽出・明確化」「課題解決の方策の設定」「課題探求・解決（教材・文献研究・模擬授業・同観察等）」「教育論文・ポスターの作成・発表」といった取組を段階的に踏んでいくことにより、自身の研究（問い、視点）の意義や意味について再確認するとともに、例えば学習内容の地域的な特性等について、より実践的で具体的な理解を促すことができたのではないかと考える。

次年度以降は、愛媛県下近隣の地域性により着目して、さらに精緻化した取組を組織していくことができるよう心がけるとともに、受講生自身が主体的に学習に取り組むことができるような方策を工夫することが不可欠であると考えられる。